

仙台藩伊達家の歴史

汐留の歴史は、1641 年、まさに仙台藩伊達家が下屋敷の敷地を拝領したことから動き出したと言っても過言ではないと思います。それでは、もう少しだけ時を巻き戻しまして、少し歴史のおさらいを。

1590 年 小田原北条氏滅亡後の関東に、豊臣秀吉の命により徳川家康が移封され、狭くて葦が生い茂る場末感漂う江戸に居を構えます。当時の江戸は、交通や物流の要衝として栄えていました。江戸入りした家康は、江戸城の粗末さよりも優先して取り掛かったのは、運河の開削工事でした。そのうちの 하나가、「道三堀(どうさんぼり)」の工事でした。道三堀というのは、現在の皇居の東側、和田倉門前の辰ノ口(たつのくち、パレスホテル様のあたり)から大手町交差点を経て日本橋川に合流する長さ 1 キロほどの水路でした。道三堀の完成によって、日比谷入り江に流れ込んでいた平川の流れを変えたことと、江戸と当時、関東最大の製塩地であった行徳(千葉県市川市)とを直結させたことに大きな意義があったようです。

1600 年 関ヶ原合戦、徳川家康の率いる東軍と石田三成の率いる西軍が美濃関ヶ原で行った合戦。 全国のほとんどの大名が巻き込まれたこの合戦に徳川家康率いる東軍が勝ったことで、徳川家康が天下人となります。

1603 年 「徳川家康」が征夷大將軍に任命され、「江戸幕府」を開府。

このころの汐留は、まだ何もない海の中でした。江戸の街も「日比谷入り江」と呼ばれる海岸線が江戸城に近い日比谷や有楽町、そしてお正月恒例の箱根駅伝のスタート & ゴール地点の大手町付近の内陸側まで延びていた時代です。この日比谷入り江の東側には、現在の中央区日本橋・京橋・銀座のあたり（南端は新橋付近）は、「江戸前島」と呼ばれる半島状の陸地で、西側の日比谷入り江と東側の隅田川の河口とに挟まれていた地形になっていました。「江戸前島」は、たとえるならば北欧のノルウェー、スウェーデン、フィンランドのあるスカンジナビア半島のように両側を水で囲まれた土地だったようです。

1601 年 仙台藩藩祖伊達政宗が江戸城の目の前の外桜田に上屋敷の敷地を拝領

仙台藩の藩祖伊達政宗は関ヶ原合戦の後に徳川についたいわゆる外様大名でしたが、豊臣秀吉の死後、伊達政宗は徳川家康に忠誠を誓い、伊達政宗の長女「五郎八姫」(いろはひめ)（後継者となる男児誕生を熱望していた伊達政宗は男子名である『五郎八』しか考えておらず、生まれたのが女兒であったが、そのまま五郎八姫と命名したといわれています。それも

どうなのかとは思いますが。)と、徳川家康の6男「松平忠輝」とを婚約させるほどの関係になり、徳川家康が将軍になると、伊達政宗は、江戸城の目の前に広大な屋敷用の敷地を拝領します。江戸城周辺は徳川家康の男系男子の子孫が始祖となっている藩、特に、徳川姓を名乗った御三家と御三卿(将軍家の血筋が絶えた場合などに、将軍を出す役割を担っていた田安家・一橋家・清水家)のほか、松平姓を名乗っている親藩大名や昔から徳川家や松平家に仕えていた譜代大名の屋敷で固められていましたが、仙台藩伊達政宗は、現在日比谷公園となっている敷地の東側という江戸城から至近の好立地の場所に屋敷地を与えられました。その敷地は、東西方向は日比谷公園内の心字池西岸から庭球場東端付近まで、南北方向は日比谷掘沿いの道路から小音楽堂付近まで広がっていたものと推定されるほどの大きさでした。仙台藩が拝領した敷地の西隣には同じく外様大名の長州藩の藩主毛利秀就が拝領した上屋敷用の敷地もありました。こちらも広大な敷地で日比谷公園の北西部と隣接する法務省あたりまでの広がりがあったようです。しかし、屋敷用の敷地と言っても当時はまだ日比谷入り江の海の中ですから、実際に屋敷を建てるにはまず埋め立て工事を行う必要がありました。日比谷入り江の埋め立て工事には、大量の土砂が必要であったため、江戸城の整備で不要となった残土のほか、本郷台地の山などを切り崩した土を入り江に入れて埋め立てを行ったようです。重機やダンプも無い時代に気が遠くなるような作業ができたものだと、エジプトのピラミッド並みに感心いたします。

この日比谷の仙台藩の敷地は、1601年から1661年までの間、仙台藩の上屋敷として機能していたようです。伊達政宗は、1636年4月20日に参勤のため仙台藩から江戸に向かっていましたが、その道中で体調を崩し、4月28日にこの上屋敷に到着するものの、同年5月24日に70年の生涯を閉じました。現在の日比谷公園には「仙台藩祖伊達政宗終焉の地」という案内看板が立てられています。警視庁丸の内警察署から近い日比谷公園の有楽口から入り、心字池に沿って日比谷見附跡を過ぎたあたりに建てられています。徳川将軍家も伊達政宗を大事にしていたようで、家康は3回、二代将軍秀忠と三代将軍家光はそれぞれ4回、この仙台藩の上屋敷を訪れていたようです。



伊達政宗というと眼帯をしている姿が思い浮かぶ方も多いと思います。実際、幼くして天然痘を患い、片目を失ったのは確かなのですが、眼帯をしていたという記録はなく、映画やドラマの影響ではないかという説があります。いずれにしても伊達政宗は、歴史ものの作品ではとても人気があり、映像化される場合は、常にカッコいいキャラクターとして描かれることの多い戦国武将です。

その後、1862年、幕末が近づく頃になると、江戸幕府の制度改革のなかで、参勤交代は3年に1度、江戸滞在は100日に緩和され、妻子の帰国も許可されます。仙台藩でもこれを機に藩主家族を国元に引き上げさせたようです。

1867年には、徳川第15代将軍の徳川慶喜が大政奉還したことにより、武士の世の中が終わり、江戸時代が終わりを迎えます。

明治新政府が徳川慶喜（旧幕府側）の官職や領地を取り上げようとしたため、旧幕府側が反発し戊辰戦争が勃発した1868年には、藩士とその家族たちも引き上げるよう命じられ、わずかな人数だけが江戸に残ることとなったようです。

1870年には仙台藩の汐留の芝口屋敷は明治政府に収公されます。

汐留エリアにおいて約200年間続いた仙台藩の上屋敷の歴史もこれで終わりを迎えます。

取材協力：仙台市文化観光局観光課様